オーディオ実験室収載

音源の比較試聴(13)
―マーラー交響曲５番―

１． 始めに

前報(12)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

２． 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果を、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のグスタフ・マーラーの交響曲５番を聴いていきます。

アナログ盤

DECCA　6.48110-1～2

　ズビン・メータ指揮ロスアンジェルスフィルハーモニー

CD

BMG　BVCC-37 7 15

　デヴィッド・ジンマン指揮チューリッヒトーンハレ

STAGE+

　クラウディオ・アバド指揮ルツェルン祝祭管弦楽団

　アンドリス・ネルソンス指揮ウィーンフィル

ベルリンフィルディジタルコンサートホール

　アンドリス・ネルソンス指揮ベルリンフィル

　グスタフ・ドウダメル指揮ベルリンフィル

CONCERTGEBOUWORKEST

　ダニール・ガッティ指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

３．音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のメータ指揮ロスアンジェルスフィルハーモニーは、1977 年 TELDEC スタディオの制作との記載がありますので、DECCA カーブではなく TELDEC カーブで聴いてみました。この曲は、悲劇的な曲想で激情を叩きつけるような表情を見せますが、TELDEC の制作によるアナログらしからぬ、激情的で鮮烈な音の展開を見せてくれます。

CD のジンマン指揮チューリッヒトーンハレは 2007 年の録音です。前報(11)の交響曲３番と同様、朗々と鳴り響き、アナログに遜色ないような鮮烈な音の展開を見せて

くれます。
STAGE+のアバド指揮ルツェルン祝祭管弦楽団は、2004 年の収録です。若干年代が遡りますが、鮮烈で迫力ある演奏です。
STAGE+のネルソンス指揮ウィーンフィルは、2022 年のザルツブルグ音楽祭での収録です。収録が新しいだけあって、音の精度がよくウィーンフィルの演奏の特徴を再現しています。
ベルリンフィルディジタルコンサートホールのネルソンス指揮ベルリンフィルは、2015 年の収録で、クリアーで大ホールに良く響いています。
ベルリンフィルディジタルコンサートホールのドウダメル指揮ベルリンフィルは、2021 年の収録で、先のネルソンス指揮同様、クリアーで良く響いていますが、収録年代が新しいせいか、細部の表現が向上しています。
CONCERTGEBOUWORKEST のガッティ指揮アムステルダムコンセルトヘボウは、2010 年の収録です。これまでの印象に比べて、音の精度が上がってきており、アムステルダムコンセルトヘボウらしい緻密で重厚な音がしています。

４．まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらには AV ドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上